

小シンポジウムB「南北アメリカにおける移民コミュニティの生成」報告要旨

【司会】南川文里（神戸市外国語大学）

【報告】

北村暁夫（日本女子大学）「戦間期における亡命イタリア人の国際的ネットワークと移民コミュニティ」

柴田佳子（神戸大学）「チャイニーズになる、チャイニーズである—ジャマイカの民族墓地をめぐる境界の諸相—」

米山 裕（立命館大学）「ロサンゼルス日本人移民社会と交通—移民コミュニティ形成・維持の基盤として交通を考える—」

【コメント】中野耕太郎（大阪大学）

シンポジウムBでは、移民史研究における合衆国中心のナショナルな枠組の相対化、および移民の生活世界としてのコミュニティの生成過程という二つの問題設定のもとで、3つの報告が行われた。

第一報告の北村暁夫氏は、「移民」と「亡命」を属人的に区別するのではなく、「状態」として理解する枠組を提示したうえで、ニューヨークのイタリア人コミュニティにおける親ファシスト運動および反ファシズム運動の諸相を紹介した。とりわけ、北村氏は、アメリカでは活発であった親ファシスト運動がファシズムをナショナリズムと重ね合わせる移民特有の解釈によるものであったことや、反ファシズム運動がフランスなどのヨーロッパ諸国や南米諸国を含めた環大西洋レベルでの広がりをもって生じたことを示した。

第二報告の柴田佳子氏は、ジャマイカにおける中国系移民の民族墓地を扱った文化人類学的フィールドワークの成果をふまえ、新移民の流入の一方で、土着化や混血化が進行する中国人コミュニティにおける儀礼の変化を論じた。柴田氏は、数多くの写真・スライドを用いて、中国系移民にとっての民族墓地という場所が修復・整備されつつある様子を紹介し、アメリカ合衆国やカナダなどの国外居住者も増加するなかで、民族墓地が移動・定着・土着化といった過程が交錯する結節点となっていることを示した。

第三報告の米山裕氏は、アメリカ合衆国の日本人移民をめぐる研究史を批判的に検討し、ゲマインシャフト的なコミュニティを想定したエスニック研究の枠組に対して、戦前期の移民社会を、移動を前提とした「在米日本人」と考える視点が有効であると主張した。そして、20世紀初頭のロサンゼルスにおける交通の整備という観点から、日本人社会の形成を論じた。米山氏は、とりわけ、ロサンゼルスの各地域を結ぶ鉄道建設や港湾整備に注目し、このような交通網の形成が、日本人移民に建設業・農業・漁業などの職業機会を与えるとともに、移民のネットワークのあり方や、出身県や業種に応じた政治権力構造をも規定したことを示した。

これらの報告を受けて、中野耕太郎氏は、アメリカ社会史研究の立場から、シカゴ学派以降の移民史研究におけるコミュニティ概念の変化を論じた。とくに、近年の同化主義的な議論の復活を批判する形でトランスナショナリズムが登場したことを挙げ、トランスナショナリズムが、移民コミュニティにおける社会的紐帯すらも脱構築しようとしているのではないかと問題提起した。その後、中野氏のコメントとフロアからの質問に対して、各報告者が応答した。議論のなかで、イタリア人社会が北イタリアと南イタリアという分裂を抱えながらも親ファシズム運動のなかでその差異が意識されにくくなったことや他のエスニック集団との反ファシズム運動の共有の可能性、ジャマイカの中国人社会が大英帝国のなかの植民地支配の遺産のうえに成り立っていることや民族墓地におけるジェンダーの作用、ゲマインシャフトの存在を前提とせず経済的合理性の視点から初期の日本人移民社会を描くことの歴史学的意義などが示された。

時間の制約もあり、フロアとの十分な議論を重ねることは難しかったが、まったく異なった3つの事例研究を通して、移動する人々が「コミュニティなるもの」を作り出す過程が浮き彫りになった。本シンポジウムによって、同化主義対トランスナショナリズムという対立図式からこぼれ落ちてしまうような、移民の豊かな生活世界を描く歴史研究の重要性をあらためて確認できたと思う。

(南川文里)